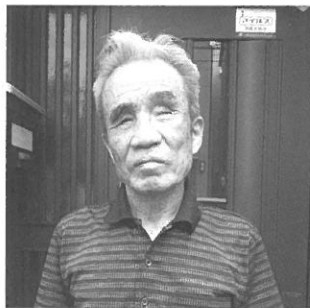


私の戦後70年



藤野高明

福岡大空襲のいつ

6月がくると思い出すことがあります。それは私が生まれ、育った町、九州福岡市が米軍機の猛爆撃にさらされた夜の事です。1945年6月19日午後11時過ぎから約2時間位でしたが、佐賀県との県境にある脊振山系上空から進入したB29と呼ばれる大型の爆撃機、200機以上による激しい空襲でした。福岡市はその北側が東西に延びる長い海岸線で、そこにたくさんの人々が住んでいました。空爆はその地域を狙い撃ちにしていた。

わが家は少し南の方にありましたから直接爆撃を受けることはありませんでしたが、たちまち北の空が真っ赤に焼けただれてゆく様は恐ろしい限りでした。この空襲で福岡市の4分の1が焼かれ10000人を越える市民が殺されました。

私は小学1年生（当時は国民学校）でしたが、数日後、先生や上級生からあの空襲の後、アメリカ兵の捕虜を敵討ちで殺したと聞きました。つまり報復処刑です。その捕虜が爆弾を落としたわけでもないのに、可哀想やなあと感じたことを覚えています。

不発弾の暴発が不幸の始まり

戦争が終わったのがその2ヵ月後、8月15日でした。世の中が一変したことが子どもにもよくわかりました。食料不足と凄まじいインフレのなかではありましたが、平和がよみがえった実感が何にも増して私たちの気持ちに安心を与えていました。

わが家に不幸が襲ったのは敗戦の翌年、1946年7月18日の朝でした。小川の岸に捨ててあった不発弾を危険な物とは知らずに友だちと一緒に拾いました。単4乾電池程度の大きさと形でした。それは片方が詰まっている管の様な物で底の方に砂粒が付着しているように見えました。釘を使って砂粒を取り除こうとしたのです。しかし砂ではなく火薬だったので激しい爆発がおきました。そのとき、両眼の視力と左右の手指をなくしました。そしてもっと大切なもの、5歳だった弟も亡くしました。正明まさあきといました。即死でした。父は34歳、母は31歳でした。

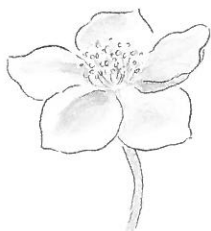
やっと平和になってもう戦争で殺されたり怪我をすることもなくなったと感じていた時期の惨劇だっただけに、若い両親の悲嘆と絶望は想像も及びません。

戦争とは本当に罪深いものです。戦争そのものが終わっていても、このような不幸の種を幾重にも持ち続けていたのですから。

不就学に捨て置かれた13年

それ以来、私は学校へ行けませんでした。親たちが放置していたわけでも、私自身が不登校になったわけでもありません。目が見えないだけでなく、両手のない子どもに点字の読み書きは不可能であり、あん摩も鍼灸も無理というのが理由で、それまで通学していた高宮小学校の南隣にあった福岡県立盲学校にも入学させてもらえませんでした。

教育の機会均等をうたった憲法26条があり教育基本法もあり、しかも盲ろう教育の義務制が1948年には実現していた、そういう



時代であったにも関わらず、より重度の障害をもつ私と私の仲間たちはそれがまるで当たり前のよう教育を受ける権利と喜びを「猶予」されたり「免除」されたりしていたのです。これは許しがたい歴史の事実です。この責任は一体誰が負うのでしょうか。

7歳から20歳までの13年と言えば、人生のうちで最も成長と躍動の盛んな時期ではありませんか。不就学を強いられ続けた本人と家族の苦悩と焦慮は筆舌に尽くせません。

光明が差し込んだのは、入院中の病院で友だちになった盲学校の生徒から教えてもらった点字の獲得からでした。18歳のときでした。

手指のない私に点字の触読は無理と言われいていましたが、ハンセン病で視力と手指を失った人のなかに唇や舌先で触読する人のいることを知り、それをヒントに私は唇で読むことを習得しました。点字の獲得は光となり、明日への希望につながりました。そしてやがてそれが生きる力となりました。

学業の13年から労働の日々へ

地元福岡の盲学校には入れませんでした。が、20歳の春、大阪市立盲学校の中学部2年生に入学が叶いました。

思えば20歳から33歳で教員になるまでの13年は私にとってのまさしく学業の時代でした。1959年から72年にあたります。不就学の13年を取り返すべく懸命に努力した青春の1日、1日でした。

盲学校で5年、大学の通信教育で5年半。その間に、浪人の時期があり教員採用試験の準備期間もありました。障害者運動が大きく前進した時代でもあって、1967年には全障研をはじめ民主的な障害者運動の組織化が実現しています。

*

大学を出て大阪市立盲学校高等部の社会科教員として働けるようになるまでも、たいへん厳しい就職運動が必要でした。思い起こすと33歳から63歳に至る就職生活があったからこそ「生きていて良かった」という実感をもつことができるのです。

30年にわたる労働の日々は文字通り「わが生き甲斐」となりました。働いて賃金を得、それで生活が成り立ちました。私の日常には常に高校生たちの青春がいきづいていました。教材研究は心に張りが高揚感をもたらしました。

私はたまたま障害者になりました。しかし教職は自らの選択によるものです。私が障害者であることには一切の責任を負いませんが、教員として働いたこと、人として生きていることには他に譲ることのできない責任を感じます。

子や孫たちへの思い

私には娘と息子、そして4人の孫がいま

す。孫は今、中1、小5、小2、そして5歳になります。先日、ふと気づいたことがあります。息子の息子が2年生、娘の三女が5歳。そうです。私が怪我をし、弟が死んだその学年と年齢とが今年偶然にも一致するのです。5歳の孫ならこの私でもまだ充分、抱き上げることができます。20キロぐらいでしょうか。「正ちゃんはまだこんなに小さかったんだなあ」とつぶやくと喉が締め付けられました。

子どもたちの世代は、今まさに働き盛りです。孫たちは日本の未来そのものです。

政府の行為によって引き起こされた戦争が原因で私たちの世代が被ったさまざまな犠牲や、戦後積み重ねてきた平和への努力が土台からないがしろにされ壊されようとする情勢がつくりだされている今、声を上げること、行動することをためらってはならないと強く思います。

ふじの たかあき／1938年、福岡生まれ。元大阪市立盲学校教員。1973年、大阪市立盲学校高等部に教員として勤める。著書に、『未来につなぐいのち』クリエイツかもがわ（2007）など。



最新刊『楽しく生きる』藤野高明
クリエイツかもがわ（2015）